カロザース夫人の『日出づる国』

戸田　徹子

Mrs. Carrothers' *The Sunrise Kingdom*

TODA Tetsuko

Abstract

In 1869, Christopher Carrothers and his wife, Julia arrived in Japan as Presbyterian missionaries. After 8 years' service in Japan, Julia went back to America and published a book about Japan named *The Sunrise Kingdom* in 1879. The book was dedicated to the members of the Woman's Foreign Missionary Society of the Presbyterian Church. It follows the development of Julia's missionary work with a special emphasis on Japanese women, children and family. This paper surveys the contents of *The Sunrise Kingdom* and shows the changes in Julia's attitudes toward Japan. It also points out that Julia's description has a tendency to idealize America in comparison with uncivilized Japan.

キーワード：ジュリア・カロザース　『日出づる国』　アメリカ女性宣教師　婦人伝道　明治日本

Key words：Julia Carrothers, *The Sunrise Kingdom*, American female missionary, women's work for women, Meiji Japan

はじめに

クリストファー・カロザースとその妻ジュリアは米国長老派教会の外国伝道協会の派遣により1869年に来日した。夫妻は当初、先着の宣教師らと横浜に滞在していたが、同年の秋には東京の築地居留地に居を移し、ここを拠点に伝道活動を展開した。ジュリアは1871年3月から翌年3月まで1年間は帰国したものの、その後、クリストファーが1876年に長老派伝道協会を辞任するまで、夫と共に伝道活動に従事した。この間に、クリストファーは築地大学校を起こし、東京第一長老教会を組織した。一方、ジュリアは少人数の女子に教え始め、1873年10月には自宅に寄宿生を預かり、女学校開校に向けて着々と準備をしていた。この学校は後に女子学院の前身であるA六番女学校となった。[1)]

プロテスタント日本伝道史においてジュリア・カロザースはすでにA六番女学校の開設者として有名である。だが、本稿で取り上げる *The Sunrise Kingdom*[2)] はこれまでほとんど紹介されたことはなかった。その理由はおそらく、本書が一見、単に外国人の目の物珍しく映じる明治日本の風物を漫然と紹介しているだけにしか見えなかったことによると思われる。しかしながら、ジュリアの著わしたこの本は女性の視点から見た草創期の日本伝道の記録として貴重であるばかりでなく、日本の女性と家庭生活を出来るだけ具体的に描きだそうとしている点で興味深い内容となっている。さらに指摘すれば、本書においてジュリアは自分の体験に基づき、宣教師たちの抱えている問題を率直に語り、どう対処すべきか心構えを示しているわけであるが、これは類書には見られない特徴であり、[3)] 貴重な証言だといえる。

本書は Book I から BookⅣまでの4部構成で、

山梨県立大学　国際政策学部　国際コミュニ ケーション学科

Department of International Studies and Communications, Faculty of Glocal Policy Management and Communications, Yamanashi Prefectural University

ほぼ時系列に沿ってジュリアの体験と伝道活動の進展が日本の風俗とともに語られている。Book Ⅰは主に日本との出会いが好意的に描かれる。Book Ⅱと Book Ⅲでは女学校を中心に伝道について、そして BookⅣでは婦人外国伝道の意義や問題点などが論じられている。本稿では、ジュリアの語る明治日本の女性、家庭、子供の有様と伝道活動の展開を紹介し、そして彼女の説くクリスチャン・ホームについて考察する。

1　日本との出会い

The Sunrise Kingdom では女性や子ども、家庭生活に関する描写が興味深い。これらのトピックは噛み砕くように分かり易い形で解説されている。かつジュリアの語りは観察記以上のものであり、明確な意図をもち、それに応じた工夫が随所に盛り込まれている。本書は長老派婦人外国伝道協会メンバーに献呈されているが、この組織は南北戦争以降に盛んになった婦人外国伝道運動を支援する目的で組織された婦人団体の一つであった。そもそも婦人外国伝道運動とは、異教女性たちは一様に男性支配の頚木の下で、性的に差別され、人権を否定され、教育の機会を奪われているという前提の下で、異教の地にキリスト教を伝え、女性の地位向上をもたらそうとする運動だった。この運動を通して、アメリカ女性たちは異教の女性と比較して、キリスト教国の女性像を美化していった。実際には、アメリカ女性たちも性別役割分業の下で、なかば家庭という枠に縛られていたわけであったが、それは認識できないままに、異教の女性たちに同情を深め、可能な限り援助の手を差し伸べようとしたのであった。[4] まずは異教の女性たちの置かれた現状を知ることが、支援者たちの関心事となった。これに応えるかのように、ジュリアは日本について出来るだけ具体的な情報を伝えようとした。

Book Ⅰは 1869 年から 1871 年までを取り扱っている。東京の築地居留地内に新居が完成し、カロザース夫妻が住み始めたのは 1870 年のことだった。その頃、小さな子供に "You foreigner, go away!" と言われたことをジュリアは記しているが、[5] 外国人はかならずしも歓迎される存在ではなかった。それどころか夫妻はスパイの偵察下に置かれていたのである。この時期、伝道活動はまだ軌道に乗っていない。知識を求め指導を仰いで夫妻を訪ねてくる日本人もいたが、その数は安定したものではなく、すぐに消息不明になってしまうような状態が続いていた。継続的な仕事が無い中で、ジュリアの関心は自ずと日本社会の観察に集中した。Book Ⅰのほとんどはその成果であるが、ジュリアの記述には面白い傾向がみられる。各章で彼女はかなり詳細に自然や日本人の生活ぶりを紹介する。その描写は独断的で誤解もあるが、全体的には好意的である。しかしながら時折、とって付けたように批判的なコメントが書かれている。来日まもないジュリアの目に日本は魅力的に映り、ついつい肯定的に書いてしまったようだ。彼女は要所要所ではたと気づき、それを打ち消すコメントや、弁解がましいコメントを付け加えたのではないかと思われる。

伝道活動が低調である限りにおいて、母国の支援者たちに報告すべき対象は日本社会の女性と家庭であった。分かりやすく説明するために、ジュリアは「オイネさん」を登場させ、彼女と彼女の家族（カジマ一家）を通して読者を日本人の家庭生活、教育、社交、娯楽、旅行に誘う。このオイネさんが実在の人物なのかどうかは不明である。彼女は 6 歳で両親と 3 人家族。家には使用人が 3 人―お手伝いの女性が 2 人と下男が一人―いる。父親は商人で、ジュリアによれば商人は日本社会で信頼できる人たちだった。[6]

オイネさんが最初に登場するのは第 5 章である。この日はオイネさんが初めて学校（寺小屋）にでかける日だった。[7] 彼女が朝起きて身繕いをし、朝食を済ませ、学校に行く様子が描かれ、学校での挨拶、授業内容、月謝について解説が続く。学校は騒がしい。子供たちは文字を習うわけであるが、日本にはひらがな、かたかな、漢字の 3 種類の文字がある。その上、言文一致体ではないので書き言葉が異なっており、複雑である。寺子屋以外に、女の子は和歌、裁縫と刺繍、楽器、茶道などの習い事に通う。オイネさんが帰宅すると、近

所の人が赤ちゃんを連れてお茶を飲みにやってくる。赤ちゃんは頭が剃られ、眉とまつげが抜かれていて、ジュリアの目には奇異に写るのだが、オイネさんは可愛いと感じている。そして夕刻になり、ランプ（行灯）と火鉢の光のもとで晩御飯を食べる。

次の第6章では、オイネさん一家は向島まで花見に出かける。[8] カジマ家は王子に別邸があり、そこに祖母と伯母たち、父親の年の離れた弟であるセンキチが暮らしている。母親が招待状を書き、飛脚に託す。手紙は箱に入れて、房のついた紐で縛る。郵便制度はまだ整っていなかった。外出の装いも詳しく描かれている。髪結いさんに髪を整えてもらった後、銭湯で一風呂あびる。そして化粧をする。日本の女性は宝石を身につけない。かわりに帯、かんざし、扇子に凝る。バッグは持たず、着物の袖を利用する。お出かけには扇子、草履、傘が欠かせない。浅草寺でお参りをした後、船で向島に向かう。自然は美しいが、神聖さ（holiness）に導く景観ではないとジュリアは述べる。川岸の旅館で卵焼き、鯛、鰻を会食する。叔父さんの家に寄り道し、従姉妹の唄を聴き、ようやくオイネさんはおんぶで帰宅する。日本の家族の社交と娯楽が描かれたわけである。日本には社交の場がないようにみえるが、そうではないとジュリアは説明し、それに代わるものとして舟遊びや寺参り、庭園めぐりを紹介するのである。

第9章と第10章でオイネさん一家は下男であるゲンジロウを連れて箱根まで旅に出る。[9] 駿河にいる父親の友人から、7月に箱根で会いたいという手紙が届き、これに応じたという設定である。まず旅装束が詳しく描かれる。それから東京から神奈川、江ノ島、藤沢、小田原、箱根、富士山と、当時の宣教師たちには馴染みの地域が紹介される。オイネさんと母親は籠を利用することはあったが、基本的に徒歩の旅で、茶屋で休息をとり、再び歩く。犯罪者が移動式の箱に入れられ見せしめにされている場面や、犯罪者の首が置かれている光景にも出会う。また各地の霊場や巡礼者たちの様子も紹介される。おそらくオイネさんの旅を通して、ジュリアはこれまで自分が知り得た場所を紹介したのであろう。

Book Ⅰでジュリアは、オイネさん一家を基軸に日本の家庭生活と女性の地位について解説をしている。日本には家庭は存在しないとジュリアは断言する。あるのは単なる住まいとしての家だ。家の造型は単純で、家具もないことから、掃除は楽である。食事も簡素なので、日本において家事は極端に容易である。[10] さらに彼女によれば、日本では少女が成人するということはない。女性は必ず誰かに従属している。このように女性の地位や家庭生活を批判しながらも、すぐに弁解する。女性は家庭で大切にされており、礼儀正しく従順だ。娘にいい衣装を着せ、学校に通わせている父親もいると補足説明するのである。[11]

日本の女性に欠けているものは何か。それは地理や歴史の知識であるとジュリアは考えていたようだ。女性たちは学びの場から遠ざけられているわけではない。学ぶ対象がたしなみ的なものに偏っていると彼女は思った。女性たちは漢字を知らないので書籍から学ぶことができない。女性の読み物として『女大学』があるが、これは女性の義務をこまごまと並べたものにすぎないと批判する。和歌もあるが、素人には理解不能で、特別に歌会（poetry-school）で学ぶ必要があるとする。口語体で書かれた小説もある。しかしジュリアはこれらに物足り無さを感じ、小説や無味乾燥な道徳本の類だけではなく、国内外の産物や歴史に関する本が必要なことを指摘する。[12] のちにジュリアは女生徒たちが記憶力に優れているものの、理解せずに暗記だけしていることに気づく。そして思考力の育成が必要だと語るようになる。[13]

Book Ⅰは子どもたちについても詳しいが、とくに第9章は子供の遊びがテーマである。[14] 日本の子供は陽気で楽しく遊んでいる。おもちゃは良く工夫されており、とりわけ人形は精工にできている。女子の鞠つきやお手玉、男子の竹馬、コマ、凧上げなど種々の遊びが紹介されている。アメリカの子供たちと異なり、日本の子供たちは泣いたり、口論したりしないとジュリアは説明する。そしてその理由として、親が厳しくしないことと、もともと子供が活力に欠けていることを指摘する。

日本の子供は楽しいことに対しても、痛いことに対しても無感覚なのだと断定する。ここまでの説明であれば、日本の子供たちはアメリカの子供たちとは異なるものの、親の愛情を充分に受けて幸福だという結論になりそうなところである。しかしながらジュリアは "They [Japanese children] do not give us so much to write and talk about as the children of our land..." と述べるのである。[16)]

ここでジュリアは子供たちの遊びを紹介し、親たちは子供に優しく接し、一緒に遊ぶことがあると好意的に解説していながら、最後のまとめの部分では日本の子供たちについて語るべきことはあまりないと結論づけている。これは必ずしも納得のいく論理展開ではなく、あたかも異教地の日本を誉めすぎてはいけないとジュリアに自制が働いたかの印象が残る。このような矛盾した表現は他の箇所にも見受けられる。第3章でジュリアは日本の自然の美しさを称えているが、最後に大切なのはキリスト教の受容であると唐突なコメントをする。[16)] これらはジュリアの描写の特徴といえるだろう。ジュリアは筆が滑って日本社会の好ましい部分に言及することも多かった。すなわちジュリアは異教社会に評価できるものを発見し、記録してしまったがゆえに、弁解がましいことを書き加える必要が生じたのである。

とはいえ Book I は一貫して母国の婦人外国伝道支援者の興味に応える内容となっている。オイネさん一家を通して、ジュリアはアメリカの支援者たちと対等な立場にある中産階級の日本女性を描いた。支援者たちの関心に応えるべく、家の設えに詳しく、学校に行くときの服装、花見に行くときの装い，旅装束と女性の外見についても情報が豊だったと考えられる。

2　伝道活動の展開

女性の視点からみた草創期の日本伝道の記録としても *The Sunrise Kingdom* は重要な意味をもつ。カロザース夫妻はキリシタン禁止令下の日本で伝道活動を開始した。未だ政情不安が続き、浪人たちがうろつき回り、外国人はその標的にされかねない時代だった。自由に行動できるわけではなく、外国人はいずれも居留地に拘束されていた。ジュリアはこの時代、すなわち1870年代のプロテスタント伝道の進展を淡々と伝える。居留地に住み、キリスト教伝道を禁止された環境の下で宣教師たちはヘボン博士を中心にまず聖書翻訳の作業に取り組み始めた。夫クリストファーもこれに参加。しかし彼は「イエス」の訳語をめぐって他の宣教師と対立するに至る。それゆえカロザース夫人も聖書の翻訳について多少なりとも考えるところがあったようだ。羊や牧場が存在しない環境で、聖書を説く困難を語る。[17)] さらにキリスト教に関心を抱く階層についての言及も鋭い。日本人は知識を求めて、宣教師の下にやってくるのであり、なかでも職のない侍が多いことを指摘する。[18)] これらの点は男性宣教師によって指摘されることはあったとしても、女性宣教師が論じている場合はあまりない。少なくとも同時代に日本で伝道活動に従事し、その体験を書籍の形で出版した女性宣教師たちの中で、ジュリアのように分析的な視点をもっていた者はいなかった。[19)] 加えて、ジュリアは日本伝道では下層階級へのアプローチが遅れていることを語る。彼女は先述の通り女子教育の分野における貢献で知られているが、意外にも *The Sunrise Kingdom* では高齢女性や按摩たちへの伝道の様子が詳述されている。[20)]

彼女は少女たちばかりでなく、これまで伝道対象に入ってこなかった社会の底辺にあった人々へも積極的に働きかけていたのである。「女性にしては」客観的な視点で伝道活動の進展を紹介しているばかりでなく、これまであまり知られていなかった彼女の直接伝道の様子が伺えるという点においても *The Sunrise Kingdom* の内容は重要である。

Book II と Book III で1872年から1876年までの5年間を網羅する。この時期、日本の政情は未だ不穏で、ジュリアは西南戦争の勃発を耳にする。当然、治安は良くない。幸い杞憂に終わったものの、外国人攻撃の噂が広がったことをジュリアは記している。とはいえ日本の欧化は着々と進行する。1872年10月には東京と横浜間に鉄道が完

成した。日曜日が導入されたのもこの頃であった。1875年の8月から9月にかけて京都を訪ねたあと、ジュリアは「今日の東京はかつての江戸とはずいぶん違う」と述べている。行政機関は細分化が進み、女子の師範学校も開校された。警察や郵便局が置かれるようになった。役所や学校など公的機関が整えられたばかりでなく、銀座には西洋建築物が並び、外国製品が売られていた。食料品も種類が豊かになった。西洋野菜や果物が栽培されるようになり、肉屋やパン屋ができ肉、牛乳、パンが容易に手に入るようになった。ジュリアは終わりのない変革が始まったと喜びをもって告げていた。[21)]

欧化の波はキリスト教に有利に働き、布教にも進展があった。日本人の受洗者が得られ、日本人の教会が組織され、賛美歌集が整う。ミッション・ハウスは盛況であった。知識を求めて、そして英語を学ぼうと宣教師のもとに集まる傾向は、女性も同様だった。欧化の時代を背景に、ジュリアは女子教育に本格的に着手する。家塾（home school）が始められた。教育熱心な男親は娘を連れて、知識を求める女性は自らの意志でジュリアの学校の門をたたいた。他の伝道地では自主的に宣教師のもとを訪れる女子はいなかったから、養子にとったり、お金を払って子どもを買ったりした。これとは対照的に日本では英語を学びたくて、生徒は自らやってきた。最初の生徒はオハマさんだった。オイネさんも加わった。A六番女学校は台所からの失火で焼失したが、旅館新山田屋を借りて授業が続けられた。ジュリアは入学者たちの名前を並べる。親に連れてこられた子どももいれば、20歳をこえた成人女性もおり、年齢差が大きかった。出身階層も様々で、役人の娘もいれば、植物画を描いている家の者もいた。[22)]

1872年に再び新校舎が完成した。辞書や訳本が整わない環境で、聖書と賛美歌は繰り返し復唱することで覚えた。幼い者たちはリーダーを、すでに英語の心得がある者は新約聖書を読んだ。英語の学習はスペリングを覚え、手本を写し、作文を書くことだった。1873年には寮ができ、子どもたちの笑い声とパタパタという足音が響くようになり、ジュリアの女学校は賑わいを増した。なかには学習が主で、聖書の教えに全く興味を示さない者もいた。しかしながらミッション・スクールはあくまで伝道が主眼であり、ジュリアは毎日、聖書の一節を黒板に書いて教えた。[23)] 1874年11月に東京第一長老教会が正式に組織されると、彼女は半ばピア・プレッシャー（peer pressure）を活用して、生徒たちに回心を迫った。だが、ここに至りジュリアは女生徒たちが入信を本人の意志で決められないことに気づく。洗礼には家族の同意、とりわけ父親の許しが必要であった。若い男性であれば洗礼を受ける決心をすぐに固めるが、女性はそれがままならないとジュリアは述べている。親の反対が強ければ無理はさせないというのがジュリアの立場だった。[24)]

やがてジュリアは日本人がやって来るのを待つばかりでなく、日本人との接点を求めて外に出ていくようになる。まず生徒宅を積極的に訪問した。これは両親や兄弟、姉妹にアプローチするいい機会になると彼女は目論んでいた。オイネさんの王子の別邸をその後も何度か訪ねている。また植物画の家や、オチエさんのおばさんを横須賀に訪ねたりしている。訪問の様子は詳しく語られているものの、これを機会に伝道成果が得られたことは特に記されてはいない。[25)]

次の段階では日本女性の援助を得て、近隣の貧しい人たちや障害者たちのところに出向くようになった。日本伝道の特異な点として、ジュリアは貧しい人たちを対象としてこなかったことを次のように指摘している。

> We have long waited for the time to come when we might go among the poor and lowly and speak to the people. A peculiar phase of missionary-life in Japan is that we began our work among the upper classes and only gradually came to the lower, while in most mission-fields labor is chiefly confined to the poor. The unoccupied Samurai, looking about for something to do or some means of

support, came to us for instruction, and to the merchant class we easily gained access, but until now we have been unable to work freely among the lower classes.[26]

これまでは敢えて働きかけなくとも旧侍階級を中心とした人々が知識や仕事を求めて、宣教師のもとに集まった。また商人は比較的近づき易かった。他の伝道地では、伝道対象がむしろ貧しい人たちに限定されていたことを考えれば、これは日本伝道に極めて特異な現象であった。ジュリアはこの点を指摘し、機が熟し本来の仕事にようやく着手できることを喜んだ。

貧しい人たちや障害者たちへの伝道を開始したのは、1875年末である。これには出口タカの存在が大きかったようだ。出口さんが女学校で暮らすようになったのは1873年1月のことだった。彼女は中年の未亡人で、漢学の知識を有し、ジュリアの女学校で当初は漢学と国語を教えていた。彼女は神道や仏教の様々な宗派に近づいてみたが心の安らぎを得られなかった。後に彼女はバイブル・リーダーとして雇われた。彼女は測り知れないほど有能な助手であるとジュリアは述べているが、彼女を伴ってはじめてジュリアは貧しい人々の中に入りこめたのである。[27] 下層階級への最初のアプローチとして紹介されているのは、人力車の車夫とその年老いた母親（ヒサ）の洗礼であり、ヒサは助手に採用された。彼女の自宅は芝に行く途中のゲンスケ町にあったというが、ここで毎週木曜日に近所の人たちを集めて聖書を読み、賛美歌を歌う会が設けられた。この会に出席していた盲目の按摩の要請で、按摩たちのために集会がもたれるようになった。目が見えないがゆえ、彼らは復唱して聖書の大部分を覚えたという。[28]

Book II と Book III でも、ジュリアは読者層を意識していた。服装や装飾品への言及は減っているが、お盆や川開き、菊祭り、そして葬儀など日本の風習の解説は多い。異教のエグゾティックな習俗を紹介した後、ジュリアはそのような土地でキリスト教伝道に従事する自分の責任の重さを語る。あるいは、日本人は今のままで十分に幸せそうなのに、なぜこの人たちにキリスト教を伝えなければならないかと自問し、滞日経験が長くなり、そして日本人をより身近に知るようになるにつれ、彼らの堕落と悲惨さが分かり、伝道の必要性が実感できると自答する。さらに科学もキリスト教と同時期に流入したことや、政府が学校を開設し始めたとライバルの出現を示唆した。いずれも本国の支援者たちに外国伝道の必要性を訴えているのである。[29]

なかでも子どもたちについては詳細に語られている。子供たちのことは Book I でも話題になっていたので、ここでジュリアの見解を補足しておきたい。日本の子供はコミカルだとジュリアはいう。一部を残して、頭は剃られている。頭が2つある子ども、すなわち子どもが子どもを背負っている姿は日本にきた外国人たちが奇異に感じたものの一つだった。子どもが子どもをおんぶするのは危険であるとジュリアは警告した。しかし総じて日本人は子どもを大切にしているとジュリアは書いている。自分が観察する限り、子どもの扱いは男女間で差はない。また障害を持った子どもも大事にされていて、隣国の中国では捨てられることもあるというが、日本ではそのようなことはない。産着を見せてもらったことがあるが、それはゆったりとしていて体の動きをさまたげず、合理的にできていると賞賛する。ジュリアは幼い子供を対象に布教活動を始めており、その様子を報告している。桃太郎や金太郎、舌きりすずめなどの昔話よりも、聖書の話を聴かせたい。そのためにも羊と子羊、羊飼いの絵が欲しいとジュリアは紙上で訴えた。[30]

一方で、どうしても許容しがたい風習もあった。それは親が勝手に結婚相手を決めることであり、しかも婚約相手と年が大幅に離れていること、婚約が決まると、婚家での養育のために、生家を離れることなどであった。ジュリアは自分の生徒の実例をあげて説明し、ばかげた慣習で、将来なくなって欲しいと語る。その上で日本と対照し、アメリカの子どもが学校で正しいことや役に立つことを学び、充分に外気にあたり、屋内でも体操が

できることが、そしてキリスト教徒であることがいかに有難いことなのかを、ジュリアは重ねて強調するのである。[31)]

滞日経験の長期化に伴い、伝道活動は内省を伴うものに、そして日本人論は手厳しいものに変化していく。ジュリアの学校は生徒の定着率があまり良くなかったようだ。日本人は新しいものに飛びつくのは早いが、忍耐を欠き、固執しない。さらに日本人が平気で嘘をつくのにも辟易した。女生徒たちが学校を辞める理由として、婚約や身内の病気などの見え透いた嘘をいうことに驚いた。日本人は本音を言わない。礼儀正しいが、表面的で、感情を表さない。本音を隠して受け答えするので、日本人は不誠実だとジュリアは記している。

3　クリスチャン・ホーム

日本をみる新鮮なまなざし（Book Ⅰ）や日本人を改宗に導こうとする熱意（Book Ⅱ、Book Ⅲ）とは異なり、Book Ⅳでジュリアは母国の外国伝道支援者と宣教師志願者に対し婦人伝道の目的と組織について解説している。Book Ⅳは宣教師側の弁明が多い。外国伝道とそのコストの正当性を訴えるあまり、伝道地の「非文明」が強調され、伝道地側からすれば愉快な内容ばかりではない。

アメリカの長老派教会内に婦人外国伝道協会が組織されたのは、ジュリアが日本滞在中の 1870 年のことだった。先述したように、*The Sunrise Kingdom* は長老派婦人外国伝道協会メンバーに献呈されたものに外ならず、婦人伝道の何たるかを伝えようとしていた。

支援者に向けて、婦人伝道の目的、給与の考え方、宣教師に求められる資質、そして宣教師と母国の支援者・支援団体の関係、宣教師と伝道地の人たちとの関係、そして宣教師間の関係について本書は論じる。異教の女性は呪われている。その堕落の深刻さは異教地に住んだ者でなければ分からないとジュリアは以下のごとく Book Ⅳを書き始める。

> Heathen women are under a curse; Christian women are restored to the favor of God through Christ. The depths of degradation in the curse and the heights of blessing in the restoration are only comprehended fully by those who live among the heathen, who can compare country with country and condition with condition.[32)]

そしてキリスト者である女性が異教の女性をキリスト教に導き、この苦境から救うべきことこそが婦人伝道の目的であると述べる。婦人伝道を支援する最初の組織として超教派の米国婦人一致外国伝道協会（The Women's Union Missionary Society of America for Heathen Lands）が結成されたのは 1861 年のことだった。その後、教派ごとに既存の外国伝道協会とは別個に女性のための女性の組織が設けられるようになったわけであるが、これらの組織をジュリアは紹介し、さらに簡単に組織や活動内容に触れている。

婦人外国伝道協会の主な役割は女性宣教師を派遣することによって異教の女性をキリスト教に導きクリスチャン・ホームを生みだすこと、そして女子に教育の機会を与えることだった。ジュリアは女学校を創設したばかりでなく、本書においてはクリスチャン・ホームの重要性を説いている。彼女がクリスチャン・ホームに言及するとき、そこには信仰のみならず、アメリカ的な生活様式も含まれていた。異教の地でホームは宣教師にとって唯一の安らぎの場であるばかりでなく、異教徒たちが仰ぎ見て、対等な夫婦関係や家事のやり方を学ぶ場として位置付けられていた。それゆえ伝道協会はまず宣教師たちに母国なみに快適な家と物質的にも恵まれた生活を保障しなければならないとジュリアは主張する。[33)]

クリスチャン・ホームへの期待は大きかった。地元の人たちの住まいは開けっぴろげで、安全性に欠け、宣教師の住居として適切ではない。それに我々は生活の質を地元の人たちのレベルまで落としたくはないとジュリアはあからさまに言う。自分たちが故国の生活様式を再現することによって、むしろ伝道地の生活レベルを上げたいと次の

ように述べる。

> Nor do we want to be dragged down to a level with the heathen in our manner of life; we want them rather to be raised to our level, and wish, therefore, to show them the beauty of Christian homes. They are attracted to the mission-houses, whose doors are always open to receive them, and we show the women our beds, which are elevated from the floor, and our more cleanly and healthful way of using sheets, and they see that our bath-rooms are in a private corner of the house, not, as theirs, in the most conspicuous part, their bath tubs often at the front door. We teach them the advantage of having the house less open and the apartments more private and all the home-life more isolated.

ミッション・ハウスは伝道地の人たちに対して常に門戸が開かれ、文明生活を誇示する場と位置付けられていた。ジュリアはベッドやシーツ、そしてバスルームの位置について触れる。家庭は一つの閉ざされた社会単位として捉えられていた。宣教師のホームは手本であり、異教地に洗練をもたらすと見なされた。ここでジュリアの言うところの洗練とは、美しくドレープのついた木綿のカーテン、絵や小さな形見、花やつたなど、家をきれいで魅力的に見せるものを意味していた。[34]

日本の家庭について、子どもの取り扱いや、親への従順と尊敬など見習うべき点があるとジュリアは述べる。しかしながら、これに絶対的に勝るキリスト教のしつけとキリスト者の家の美しさを異教徒に示す必要があると主張する。たとえば規則正しい生活習慣と時間の大切さを異教徒の主婦たちに教え、宣教師が模範を示して、目標のない怠惰な生活を送らないようにさせる。[35] クリスチャン・ホームは快適な住居ばかりでなく、生活規律そのものを伝える場として機能すると考えられていたのである。

伝道地でアメリカなみの生活レベルを維持するには当然お金がかかる。宣教師は殉教者ではない。借金を抱えることにならないように、充分な給料がいる。さらに故国にいるとき以上に、召使の必要性が高い。宣教師にとって時間とエネルギーは非常に大事で、布教活動に専念するためにも、伝道地では雑事は召使に任せるのが合理的なやり方である。経費はアメリカの半分ですむし、召使たちはキリスト教の感化の下に置かれるので、構わないではないかとジュリアは説明する。[36] 快適な暮しがあってはじめて、精力的な伝道活動も可能になるということであろう。19 世紀後半のアメリカ人宣教師たちがいかに文明格差と所得格差を前提に伝道活動を展開していたかが伺えるコメントである。

海外にあって宣教師たちが現地の暮しとはかけ離れた贅沢な生活を送っているという批判はすでに存在していた。そこでジュリアは次の引用のごとく、キリスト教国であるアメリカに留まっている女性はいかに幸せであるかを自覚して欲しいと語る。

> ... you must realize your own privileges. Oh, church-women at home, what a mighty army do you seem to us! Surely every one in your land is taught of Jesus. You do not have to wait month after month to learn a strange tongue before you can begin to teach the heavenly language or the new song. You never had to see your pupils tremble before the death-penalty or come to you in danger of persecution. You do not need to hide your Bibles under your pillows, as I have done, because the volumes are so scarce. How rich you are in Christian literature! You scatter it over all the land. If we had your numbers and your material in a few days all Japan would know of the Lord. See that you rightly value and rightly use your privileges.[37]

ジュリアは伝道地における宣教師の困難を強調する。宣教師は現地語の習得に時間を費やすばかりでなく、生徒たちが死刑に脅え、迫害の危険を犯すのを目にする。聖書は数が足りなくて貴重なので、枕の下に隠した経験があるとジュリアは述べる。そして、これに比べアメリカに住んでいる貴方がたはキリスト教文書に恵まれていて実に幸せであると説くのである。

ジュリアは語学習得の必要性や伝道協会や支援者への手紙の重要性など、海外伝道を志願する者たちへのアドバイスも書いている。なかでも女性宣教師に求められる資質に対する見解には含蓄がある。女性が伝道地に赴く場合、男性宣教師の妻である場合と独身女性の場合に分けられる。伴侶を選ぶのは男性であるから、前者のときに婦人伝道協会が関与する余地はない。後者の場合、婦人伝道協会が人選をする。どのような女性が相応しいか。健康で明るい性格で、道徳的にも知的にも優れた力をもった人材がいい。より具体的には世界史の知識を有し、調和がとれて明晰な頭脳をもっている人が望ましい。これはごく一般的な回答であろう。ジュリアが最初に示した条件とは、心が安らかなことであった。母国で心の平和を得られなかったからといって、伝道地にそれを求めてはならない。かつ何かしら心の慰めになるような娯楽も必要だと主張している。異教地での生活は孤独との戦いでストレスがたまるゆえ、花や音楽、美しい景色、刺繍など自分を慰める方法を知る人がいいというのである。[38]

見慣れぬ環境と風変わりな習慣、そして異教徒との付き合いの中で、宣教師たちが強いストレスを感じたであろうことは想像に難くない。ジュリアも日本の女性たちとの関係に疲れてしまうことがあったようだ。ここの女性たちは真実や徳を知らず、浅はかで頭脳が十分には発達していない。しかし高いレベルの文化を吸収する能力はあり、それなりの成果は得られる。とはいえ常時、異教の女性に囲まれている生活は耐えがたいと次のようにいう。

> This constant contact with inferior minds, this continual giving out and receiving nothing in return, the feeling that years—even the best years—of our life are slipping away and we are gaining nothing intellectually,—these are among the greatest trials to which a missionary here is subjected.[39]

与えるだけで、お返しとして得られるものはない。知的刺激を欠き、自分が消耗するだけだとジュリアは語る。この言葉もまた、あくまで読者を意識した発言だったと理解できるかもしれない。ジュリアの日本との出会い、日本での体験、そして日本女性たちと関係が実際にどのようなものだったかについては、*The Sunrise Kingdom* のテキストを離れ、また別途、検討する必要があろう。

おわりに

ジュリアは夫クリストファーが長老派外国伝道協会を辞任したのに伴いA六番女学校を去り、最終的には夫を日本に残し1877年に一人帰国した。本書の出版は1879年のことである。内容から推察すると、彼女は何らかの外国伝道機関紙に投稿してきたものを帰国後あらたに編集し、婦人外国伝道に関する情報を補って出版したものと考えられる。婦人外国伝道支援者を念頭において執筆されただけに、日本関係の情報のなかでも女性と子ども、そして家庭生活に関するものが多いのが特徴である。来日したばかりの頃のジュリアは驚きに満ちた目で日本を観察し、率直な感想を本国に書き送ったのであろう。日本人との交流が深化し、伝道活動が本格化するに従い、日本を見る目は厳しくなっていった。彼女は婦人伝道の理想を謳い、日本女性の地位の低さを嘆き、一方で母国アメリカのクリスチャン・ホームを美化した。ジュリアは *The Sunrise Kingdom* において日本とアメリカの女性を対比的に描くことによって、日本への関心を喚起し、海外伝道支援を仰ごうとしたのであった。

註

1）大濱徹也『女子学院の歴史』（学校法人女子学院、1985）、30－48頁。小檜山ルイ『アメリカ婦人宣教師』（東京大学出版会、1992）、189－212頁。

2）Julia D. Carrothers, *The Sunrise Kingdom; Or, Life and Scenes in Japan, and Woman's Work for Woman There* (Philadelphia: Presbyterian Board of Publication, 1879).

3）同時代の女性宣教師の書籍として次の3点を参照した。Mary P. Pruyn, *Grandmamma's Letters from Japan* (Boston: James H. Earle, Publisher, 1877); L. H. Pierson, *A Quarter of a Century in the Island Empire or The Progress of a Mission in Japan* (Tokyo: Methodist Publishing House, 1899); Margaret T. K. Ballagh, *Glimpses of Old Japan 1861－1866* (Tokyo: Methodist Publishing House, 1908).

4）拙稿、「アメリカにおける婦人外国伝道協会の成立」『アメリカ史研究』10（1987）、40－48頁。

5）*The Sunrise Kingdom*, 57.

6）*Ibid.*, 62, 76－77.

7）*Ibid.*, 59－74.

8）*Ibid.*, 75－90.

9）*Ibid.*, 128－152.

10）*Ibid.*, 66, 72.

11）*Ibid.*, 72－73.

12）*Ibid.*, 103－105, 109.

13）*Ibid.*, 198.

14）*Ibid.*, 110－119.

15）*Ibid.*, 119.

16）*Ibid.*, 42.

17）*Ibid.*, 172－175.

18）*Ibid.*, 267.

19）註3）を参照のこと。

20）*The Sunrise Kingdom*, 267－286.

21）*Ibid.*, 261－265.

22）*Ibid.*, 153－158; Jane Hunter, *The Gospel of Gentility* (Yale University Press, 1984), 178－179.

23）*Ibid.*, 275.

24）*Ibid.*, 219, 222, 236.

25）*Ibid.*, 188.

26）*Ibid.*, 267.

27）*Ibid.*, 205, 268.

28）*Ibid.*, 268－271.

29）*Ibid.*, 170, 191.

30）*Ibid.*, 294－300.

31）*Ibid.*, 300－301.

32）*Ibid.*, 307.

33）*Ibid.*, 328.

34）*Ibid.*, 329－330.

35）*Ibid.*, 351－352.

36）*Ibid.*, 328, 331.

37）*Ibid.*, 338－339.

38）*Ibid.*, 357－360.

39）*Ibid.*, 344.